様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０４５３０

研究課題名（和文）日本の貢献を踏まえた中東・北アフリカ地域の都市計画史-「イスラム都市」論を越えて

研究課題名（英文）Urban Planning History of the Midlle East and North Africa region from the viewpoint of Japanese cooperation-Beyound the Islamic city-

研究代表者
松原　康介（Matsubara, Kosuke）

筑波大学・システム情報系・准教授

研究者番号：００５４８０８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、番匠谷堯二を嚆矢とする日本人計画家の中東・北アフリカ地域における業績を、協働し影響を与え合ったキャンディリス、アニング、エコシャールら多くのフランス人・アラブ人カウンターパートとの関連も踏まえて解明したものである。特に、清家清に起源をもつ「進化型計画論」の展開について、ATBAT（フランス語圏）における国際交流を背景として明らかにしたうえで、アルジェ、ベイルート、ダマスカス、アレッポにおけるその具体的な実施状況を明らかにした。ヘレニズム基盤を躯体とし、イスラーム期における住民主体の増築に基づく空間形成は、一つの「進化」とみなしうることが仮説的に示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、形態論的な「イスラム都市」概念を批判的に検証しつつ、生きた都市としての空間変容を「進化型計画論」との関連で実証し評価することが目的であった。これに対し、68年計画が、ヘレニズム基盤からイスラーム的な住民自身による空間形成へと移行してきた事実に範を得た「進化型計画」であった可能性があることを示唆したことが、研究の成果である。これは都市計画史の再考と、ヘレニズム、イスラームに日本型計画論も交えた融合空間という新たな仮説を導く。日本の貢献を踏まえた都市計画技術協力史の国際的発信に努めたい。

研究成果の概要（英文）：This study elucidates the achievements of Japanese planners in the Middle East and North Africa, starting with Gyoji Banshoya, in relation to their many French and Arab counterparts, including G.Candilis, G.Hanning, and M.Ecochard, with whom they collaborated and influenced each other. In particular, the development of "evolutionary planning theory", which originated with Kiyoshi Seike, was clarified in the background of international exchange in ATBAT, and its specific implementation in Algiers, Beirut, Damascus, and Aleppo was clarified. It is hypothetically suggested that the formation of spaces based on Hellenistic foundations and extensions by the residents in the Islamic period can be regarded as an "evolution".

研究分野：都市史・都市計画史

キーワード：ATBAT　アルジェ　進化型計画論　ビドンヴィル　ダマスクス　フランス語圏　地中海　ヘレニズム基盤

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

破壊と再生が繰り返される中東・北アフリカ地域の都市研究は、欧米において植民地時代のオリエンタリスト的「イスラム都市」論への反省から新たな展開を迎え、国内でも 1980 年代に「イスラムの都市性」に始まる研究プロジェクトが実施されてきた。そこでは、「モスク」や「袋小路」といった旧市街の典型的特徴を強調する「イスラム都市」というフレームの超克が目指され、主に歴史学・人類学・社会学等の人文諸学において成果があげられてきた。しかし、例えば「イスラム都市」批判の急先鋒であった社会学者アブー＝ルゴドによる、欧米式教育を受けた「アラブ人プランナー」が「イスラム都市」的イメージを再生産してしまうという、現実の都市計画に突きつけられた問題提起は、殆ど議論されてこなかった。一方、1950 年代からは日本の国際協力に基づく都市計画が連綿と実施されてきたことは、必ずしも知られていない。欧米中心の既往研究と計画論に対して、日本の協力という新たな視点を取ることで、「イスラム都市」論を乗り越える、日本発信の計画論を展望することが期待される。

2. 研究の目的

本研究は、一連の協力を先導した番匠谷堯二と、協働・継承した日本人専門家らが、ヘレニズムからイスラムへと重層化した旧市街の複雑な空間構成を読み込み、「イスラム都市」論に基づくフランス人計画家らと協働し影響を受けながらも日本型計画論を創出・実践していった過程を、資料収集とフィールドワークから歴史的に考察し、フランス海外都市計画の系譜に対する日本型計画の位置付けと、関連計画による実際の都市空間および住民生活の変遷を明らかにして、「イスラム都市論」を越えた、現代的で多様な視点から同地域の都市計画の将来を展望することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、番匠谷堯二を嚆矢とし、今日の JICA 専門家に至る日本人計画家の業績を、協働し影響を与え合ったキャンディリス、アニング、エコシャールら多くのフランス人・アラブ人カウンターパートとの関連も踏まえて解明する。計画業績は、研究・提案に終ったもの、実際に法定計画となったもの、更に具体的な事業が実施されたもの、に分類して扱う。主な対象都市として、実際に上記計画家らが活動したアルジェ、ベイルート、ラシュト、ダマスカス、アレッポに着目し、計画による都市空間と住民生活の変遷を解明する。

本研究では、３年間で４つの小目的、①旧市街空間の特徴と計画の前史、②日本の協力による都市計画の内容把握、③「イスラム都市」と「日本型計画論」の相互関係、④都市計画の実績の評価、から段階的にアプローチする。

なお、2020 年はコロナ対応のため、当初構想していた現地調査の一部を省略し、既往研究における現地調査記録（具体的には、1950 年代以降ピエール・ブルデューが実施していた都市農村調査）を参照し、代替知見とした。

4. 研究成果

研究成果は、別途示した学術論文毎にテーマが設定されその中でそれぞれ提示された。以下では、上で示した小目的毎に成果を整理し概括する。

①旧市街空間の特徴と計画の前史

ローマの植民都市に起源を持つアルジェでは、旧市街（カスバ）の南部にグリッド型街路の痕跡を確認できるが、都市はイスラームに支配されるまでに放棄されていた。以後はイスラームに独自の施設建築が導入され、スーク（市場）の形成と、公私の分離に根差した空間形成が進んだ。ローマの名残を持つ直線的街路の一部はフランス植民地期になっていわゆるオスマニザシオン（道路開削）の対象となっている。ヘレニズム期の都市建設がより明確なダマスクスにおいては、イスラーム期に施設の転用がなされつつ、より複雑な街路網が形成されたが、「まっすぐな道」等にヘレニズム基盤の痕跡が今日でも確認できる。形態論に基づく単純な「イスラム都市」という呼称は名実ともに無理があることが（再）確認された。

②日本の協力による都市計画の内容把握

ル・コルビュジエらによって創設された ATBAT は一つの国際交流組織であったとみなしうるが、キャンディリスが主導した研究「最大多数のための住まい」においては、日本の番匠谷堯二が参画し、一定の貢献をしていた(図 1)。番匠谷はその後、アルジェの都市計画局に赴任し、そこでビドンヴィル（スラム事業）に参画した。そこで CIAM アルジェの実践に触れ、スラム住民のための応急仮設住宅(Cité de Recasement)の計画に携わっていた。ダマスクスの 1968 年計画は M.エコシャールと番匠谷の共作であるが、特に詳細計画の図面を番匠谷が担当していたことがわかった。アレッポの 1975 年計画は番匠谷が筆頭計画者となっている。

図 1：キャンディリスによる「正方形の家」解釈（左から右へ進化する）

③「イスラム都市」と「日本型計画論」の相互関係

ATBAT における研究テーマの一つは、建築家は躯体のみを与え、住まい手自身が希望に基づ

いて空間を形成していくという可変性を特徴とする「進化型計画論（Habitat Evolutif）」であった。ひとつの国際交流を経て、清家清を源流とする番匠谷の住宅論が、モロッコを経てフランスでの実践を行っていた G.キャンディリスの計画に取り込まれた可能性が高いことがわかった。一方の番匠谷は、CIAM アルジェが発表したビドンヴィル（スラム）調査の内容の学習を通じて、ビドンヴィルとカスバの形成プロセスが類似していることを認識し、住民自身による市場の創設や中庭式住宅といった空間形成をポジティヴに評価した。番匠谷自身が計画した住宅もまた、第一段階（図 2）と第二段階からなる進化型計画論に基づくものであり、旧市街の漸進的な形成プロセスとも近似するものであることがわかった。ダマスクスにおいては、これまで近代主義に基づく道路計画が批判されてきたが、1968 年計画を精査した結果、ヘレニズム時代の都市基盤を、「デガジュマン」とよばれる一種の発掘を伴う形で再構築し、多文化的な都市空間として持続させるというコンセプトがあったことが明らかとなった。ここで、ヘレニズム基盤を一つの躯体とみなし、イスラーム期の増改築を住民自身による空間形成と位置付けるなら、ヘレニズムからイスラームへの都市空間の変容（図 3）は、一つの進化であるとみなすことができる。J.ソヴァジェと協働する考古学者でもあったエコシャールと、進化型計画論の計画者であった番匠谷とによる 68 年計画は、それを明確に認識した上で、増築空間の一定の縮減を目指したものであったと考えられる。なお番匠谷は、アレッポ計画では　旧市街を貫通する道路を削除し袋小路型駐車場を計画している。

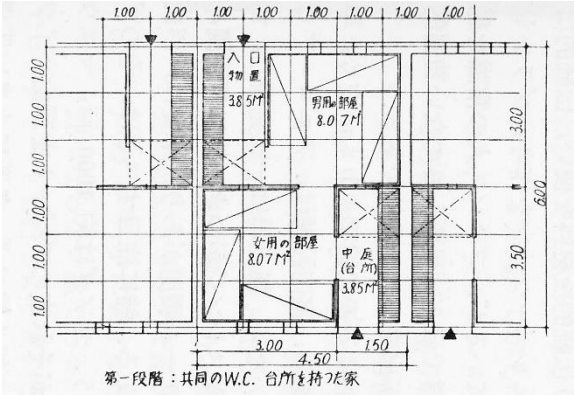

図 2：番匠谷によるアルジェの応急仮設住宅（第一段階）

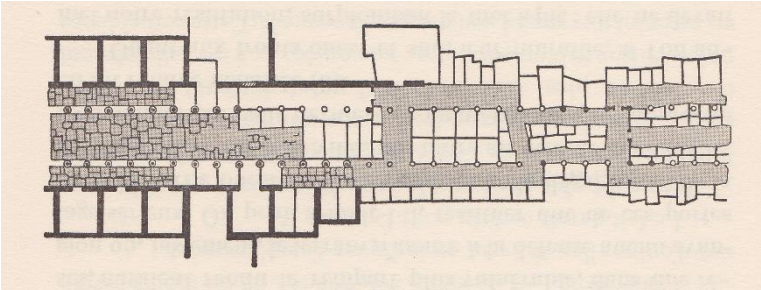
図 3：ソヴァジェによるヘレニズム基盤からイスラーム的都市空間への変容仮説

④都市計画の実績の評価

キャンディリスによる郊外住宅には、番匠谷による「正方形の家」を彷彿とさせるプランがみられ、チーム・キャンディリスの独立後におけるバニョル・シュー・セズ等の郊外団地に実現されているとみなすことができる。アルジェにおいては番匠谷の応急仮設住宅が実現されたという記録もないが、応急仮設住宅自体その多くが取り壊されており確認はできない。ダマスクスにおいてはユネスコの批判を経て計画は一時的に停止されたとされているが、更新された事実もなく現行計画のままであり、今日の日本の国際協力においてもこれをもとに計画されている。観光分野においてもヘレニズム基盤の重要性は指摘されており、残存する遺構を発掘し再構築している箇所は多く見られる。オスマニザシオンの形をとらなくても、ヘレニズム基盤を活かしたまちづくりや観光は重要性が高いといえ、そこに 68 年計画の精神（図 4）が継承されているといえる。

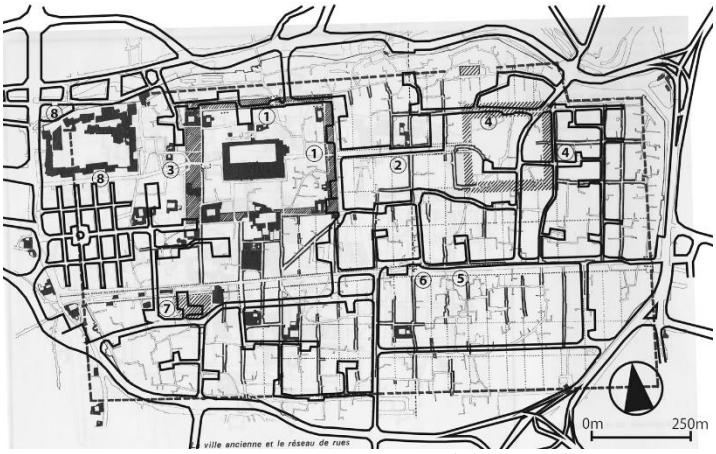

図 4：68 年計画におけるデガジュマンと道路計画との整合

本研究は、形態論的な「イスラム都市」概念を批判的に検証しつつ、生きた都市としての空間変容を「進化型計画論」との関連で実証し評価することが目的であった。これに対し、68 年計画が、ヘレニズム基盤からイスラーム的な住民自身による空間形成へと移行してきた事実に範を得た「進化型計画」であった可能性があることを示唆したことが、研究の成果である。これは都市計画史の再考と、ヘレニズム、イスラームに日本型計画論も交えた融合空間という新たな仮説を導く。日本の貢献を踏まえた都市計画技術協力史の国際的発信に努めたい。

この他、『世界都市史事典』では各都市の歴史を最新の研究に基づき更新した。また『地中海を旅する 62 章』ではアレッポにおける番匠谷の足取りを仮説的にまとめた。また課題として、ヘレニズム基盤の扱いを巡って、考古学分野との交流を踏まえつつ、現代都市内部の遺構については考古学分野では専門的に扱いえず、新たなアプローチが必要であることが示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 松原康介	４．巻 84
２．論文標題 戦後仏語圏における「最大多数のための住まい」から「進化型住宅」への展開　-ATBAT（建造者アトリエ）の国際・地域交流活動の歴史的経緯に関する研究　その2-	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本建築学会計画系論文集	６．最初と最後の頁 1473～1483
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3130/aija.84.1473	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松原康介	４．巻 54
２．論文標題 ダマスクス1968年計画におけるヘレニズム基盤の再構築事業	５．発行年 2019年
３．雑誌名 都市計画論文集	６．最初と最後の頁 630～637
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11361/journalcpij.54.630	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松原康介	４．巻 84(760)
２．論文標題 戦後仏語圏における「最大多数のための住まい」から「進化型住宅」への展開　-ATBAT（建造者アトリエ）の国際・地域交流活動の歴史的経緯に関する研究　その2-	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本建築学会計画系論文集	６．最初と最後の頁 1473-1483
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3130/aija.84.1473	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松原康介	４．巻 5
２．論文標題 アルジェ・植民都市計画の変遷　-モダニズムの地域性-	５．発行年 2018年
３．雑誌名 都市史研究	６．最初と最後の頁 55-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kosuke Matsubara	4．巻 2
2．論文標題 Genealogy of Haussmannization in Aleppo: A case study of the overseas deployment of French urbanism	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 2: Tehran, Aleppo, Istanbul, and Beirut	6．最初と最後の頁 183-198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kosuke Matsubara	4．巻 4
2．論文標題 Some learnings Gyoji Banshoya acquired from the spatial composition of the ancient shantytown of Mahieddine, in 1950's Algiers: Research on dwelling practice around the “bidonville (shantytown)” project in Algiers during the Late Colonial Period, Part 1	5．発行年 2021年
3．雑誌名 JAPAN ARCHITECTURAL REVIEW	6．最初と最後の頁 343～355
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/2475-8876.12203	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Alkazei Allam、Matsubara Kosuke	4．巻 1
2．論文標題 Post-conflict reconstruction and the decline of urban vitality in Downtown Beirut	5．発行年 2020年
3．雑誌名 International Planning Studies	6．最初と最後の頁 1～19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/13563475.2020.1839388	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Kosuke Matsubara	4．巻 3
2．論文標題 （翻訳論文）A shift from “habitat pour le plus grand nombre” to “habitat ?volutif” in post‐war francophonie: A study on the history of international and regional exchange activity of ATBAT(Atelier des B?tisseurs), part 2	5．発行年 2020年
3．雑誌名 JAPAN ARCHITECTURAL REVIEW	6．最初と最後の頁 601～614
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/2475-8876.12179	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 Kosuke Matsubara
2．発表標題 The master plan of Damascus elaborated by Michel Ecochard and Gyoji Banshoya in 1968
3．学会等名 International Policy Forum for Urban Growth and Conservation, Tabriz, Iran（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 松原康介
2．発表標題 ジョルジュ・キャンディリスの計画論「進化型住宅」における番匠谷堯二の貢献について
3．学会等名 日本建築学会大会（金沢）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Kosuke Matsubara
2．発表標題 Islamic Mixed Use of the medina of Fez -A case study of the Guerniz quarter
3．学会等名 Management Strategy for Creating Innovative Society in Islamic Cities, Makassar, Indonesia（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 和田夏音・松原康介
2．発表標題 モロッコ・ラバトにおける新旧市街の一体的な世界遺産構成について
3．学会等名 日本建築学会大会（関東）
4．発表年 2020年

１．発表者名 戸田理香子・松原康介
２．発表標題 パリ移民居住地にみるソーシャルミックスの都市計画　-パリ北東部プロジェクトを事例として-
３．学会等名 日本建築学会大会（関東）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Kosuke Matsubara
２．発表標題 Urban Cooperation for Multilayered Fabric of the Middle East and North Africa (MENA)
３．学会等名 Tsukuba Global Science Week(TGSW) 2020（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

１．著者名 布野修司	４．発行年 2019年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 972
３．書名 世界都市史事典	

１．著者名 松原康介	４．発行年 2019年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 400
３．書名 地中海を旅する62章	

１．著者名 日本沙漠学会	４．発行年 2020年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 534
３．書名 沙漠学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

筑波大学研究者総覧
https://trios.tsukuba.ac.jp/researcher/0000000877
都市文化共生計画研究室
http://infoshako.sk.tsukuba.ac.jp/~matsub/index.html
中東都市多層ベースマップシステム
http://asp.netmap.jp/mebasemap/index.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Urban Planning History in West Asia -Special workshop of the Management Strategy for Creating Innovative Society in Islamic Cities	2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
イラン	University of Tabriz			
アルジェリア	Ecole d'Architecture et d'Urbanisme	Centre d'etudes diocesain	Universite des sciences d'Oran	他4機関
フランス	Ecole d'Architecture Paris la Villette	Universite Paul-Valery Montpellier 3		
インドネシア	State Islamic University Alauddin			
レバノン	ベイルート・アメリカン大学			

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	ラヴィレット建築大学校	モンペリエ第三大学		
モロッコ	アル＝アハワイン・イフラン大学			